

戦争体験談

尾崎 徹（昭和4年生まれ）

あの日は朝から夏の暑い日射しが照り付ける昼下がりの休憩時間中のことであった。突然に格納庫のスレートの屋根がバリバリと言う音と共に列になって穴が空いて来たと思ったら、何か太い棒のようなもので顔面を撲られたような衝撃が走った。これは敵機グラマンによる機銃掃射だと感じたので飛び出して壕の土手に身を隠したのでした。敵機が去ってから隊外の山中に疎開していた病室に收容されたのです。そこは病室とは名ばかりのお寺の庫裡だったのです。軍医によると「機銃弾擦過傷」で前歯が2本折られていました。「貴様はあと一寸ずれていたら頭を貫通してあの世行きだったよ」と。あの日とは昭和20年7月24日のことでした。

私は昭和19年6月に高田農学校を休学して海軍甲種飛行予科練習生として愛知県の岡崎海軍航空隊に入隊して六か月の教育を受けたあとに、神奈川県横浜海軍航空隊に転属になり、1か月後に香川県の詫間海軍航空隊の中の第五航空艦隊第801航空隊所属となったのであります。ここは瀬戸内海に面して前面は波静かで点々と島影が見えて、後ろには小高い山を背負っている水上機の基地でした。

第801空というのは当時海軍で唯一つの偵察飛行艇の基地で、2,000馬力のエンジンを4基搭載して燃料のガソリンを50本余り積んで、夕方ごろに飛び立って数百キロメートルを飛びながら敵の艦隊の動向を把握するという任務でした。吾々は未だ実戦配備される身分ではなかったので出発・帰着の飛行作業の毎日でした。

それから程なくして終戦となって復員してきたのですが、考えてみると15才で軍隊へ行き内地とは言え飛行基地にいる限り敵の攻撃目標になっていることは勿論承知のうえであって、グラマンがくれば機銃掃射の洗礼を受けることは容易に理解していたはずです。しかし毎日の勤務の中で、また生活の中で恐ろしいとか逃げ出そうとか家に帰りたいとか思ったり考えたりしたことは全く無かったのであります。

それはなぜだろう。今振り返って見ると小学校1年生のときに2.26事件があり、それから日支事変になってからは出征兵士を送っていくことが度重なるにつれて、いずれ俺も行くんだというような意志が芽生えてきたのではないかと思う。農学校に入学してからも学校生活は班単位の活動が主体となり屋外作業も実習活動も仕組まれていて、更に軍事教練が教科の中心となり正に軍国教育そのものであった訳です。やがて山本五十六連合艦隊司令長官の戦死が報じられ前線に於ける戦況の変化がある中で「予科練」の募集があつて、学校からの奨めもあつたので、応募するのは当然という考え方であつた訳です。1次試験、2次試験が終わり入隊通知が来てみると、同級生の中で数人しか行かないことになり、何か一寸さみしい気持ちになったのは確かでした。

そんな一寸中途半端な気持ちがあつた中で、いざ入隊してからは全く想像を絶するきびしい訓練の明け暮れに歯を食いしばって耐えたのでした。25名で1ケ班、それが10ケ班で1分隊という組織編成で、すべての訓練行動を行い一人の脱落があれば全員の責任となり練兵場を周回する

駆け足^{かあし}か腕立て伏せの罰になったのです。このような規則正しい訓練と一般の世間では味わえない3度3度の食事があり、ことによって精神的にも体格的にも1廻りも2廻りも成長し、全く別人に仕上がったのであります。戦況の詳細も知らされないまま終戦となり、隊の内外も一般も大混乱の中で近くの漁船で宇野^{うの}港へ上陸し、あとは貨車の乗り継ぎでやっと帰郷したのです。身のおかれた状況の急転回で順応できずに空しい時間が過ぎたのです。

その後公務に着き、大きな組織の下積みであっても軍隊経験からすれば大した事ではなく、死^{きら}に曝されたことを考えれば極めて小さい事であって、昔の事を思い起こし、それをバネにして頑張ってきたような気がします。

現在も喜寿^{きじゆ}を過ぎて農業を職業として米づくりや畑仕事も一応人並に取組んでられるのは、約1年余りの軍隊の体験が私の基礎を造ってくれたものをつくづく考えているところです。